

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	① 乙 第 号	氏 名	岩本 綾
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員 兼総合政策学部教授	平高 史也
	副 査	政策・メディア研究科委員 兼総合政策学部教授	古谷 知之
		政策・メディア研究科委員 兼総合政策学部准教授	杉原 由美
		信州大学医学部保健学科准教授	山崎 浩司
学力確認担当者：			
<p>岩本綾君の学位請求論文「社会的「つながり」を形成する留学：社会関係資本から見た高校交換留学体験とその支援」は、高校交換留学体験の過程を帰国後まで含めて明らかにし、その中の人同士の「つながり」、すなわち社会関係資本に注目することで、留学体験の社会的インパクトを考察した論文である。</p> <p>近年、日本社会では留学を促進する動きが活発になっている。それは、グローバル化が進む中で日本が取り残されかねないという危機感があり、留学は「グローバル人材」育成の切り札として期待されているからであろう。一方で、「グローバル人材」育成の言説を支えるメリトクラシーは行き過ぎの様相を見せ、このままでは留学が格差拡大を助長する新たな要因ともなりかねない。やみくもな留学促進の前に、私たちはなぜ留学を促進するのかという問題を、立ち止まって考える必要がある。</p> <p>本研究は、「グローバル人材」育成の手段として強迫的に留学を促進することに異議を唱え、それとは異なる留学の捉え方や意義を明らかにすることを第1の目的とした。</p> <p>第1章では、本研究の背景を述べ、課題を明らかにした。現行の「グローバル人材」育成の手段としての留学促進策は、弱肉強食型の競争を助長し、格差の拡大、社会の分断を招きかねないものであること、また、そうした留学促進策が期待通りに機能してもいないことを指摘し、留学を促進するためには、「グローバル人材」育成の手段としての留学とは異なるロジックが必要であることを述べた。目指す社会像としては、今田（2002）が提唱した「共生配慮型の競争社会」を挙げた。</p> <p>さらに、留学のさまざまな形態を整理するとともに、留学には国家戦略的な側面と個人の成長のための体験としての側面があることを述べ、これまでの留学研究においては後者への焦点化が不十分であることを指摘した。その上で、本研究は高校交換留学に絞って検討することとした。それは、高校交換留学が、「グローバル人材」育成のための留学とは一線を画し、英語力など特定の能力の向上より異文化生活体験そのものを重視するためであり、そのことが本研究の第1の目的を果たすための事例として適していると考えたからである。</p> <p>本研究の第2の目的は、より実践的に、高校生の立場に立った交換留学の支援策を具体的に提示することである。「共生配慮型の競争社会」の実現のために高校交換留学のような留学が役に立つならば、そうした留学を促進していくことが求められる。本研究は特に、帰国後の生活に留学体験を位置づけ活用しようとする場面と、留学動機を形成していく場面について、支援策を検討することにした。</p> <p>第2章では、「つながり」すなわち社会関係資本についての先行研究を、教育との関連を中心に概観した。社会関係資本は、本研究が、留学を「グローバル人材」育成とは異なる面から理解する視点として導入したものである。先行研究の整理から、留学と社会関係資本の関係を3点指摘した。1点目は、留学参加が社会関係資本の多寡に左右されていること、2点目は留学中に利用できる社会関係資本によって留学成果が左右されること、3点目は留学の結果として社会関係資本が増強されることである。ただし、そうした関係性がなぜ、どのような過程で生まれるのかという点は未解明であり、特に日本から海外への留学を対象としたとき、さらに高校生という、大学生とは異なる社会的文脈を対象としたときの議論は乏しい。そのため、本研究ではその点を明らかにすることとし、第3章では以下の課題を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高校交換留学体験のある大学生はどのようなプロセスで留学体験の意味を認識していくのか 2. 高校交換留学体験者はどのようなプロセスで海外進学を決めていくのか 			

- 3a. 高校生はどのようなプロセスで英語圏への交換留学を決意するのか
3b. 高校生はどのようなプロセスで非英語圏への交換留学を決意するのか

これらの課題は、ブルーマーのシンボリック相互作用論に基づいて、社会的相互作用に注目したことを下敷きとしている。研究方法としては、領域密着型のコンパクトな理論を志向するグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を採用することとし、GTA の中でも特に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を選んだ。第3章の後半ではM-GTA を選択した理由と具体的な分析方法について説明し、さらに、本研究が行った調査について、対象者、対象者と調査実施者 (筆者) との関わり、調査方法について説明した。

第4章と第5章では、本研究の第1の目的である、「グローバル人材」育成のための手段としての留学とは異なる視点から高校交換留学を理解するために、高校交換留学体験者である大学生が、自身の留学体験を帰国後の生活の中でどのように位置づけたり、進路選択に結びつけたりするのかというプロセスの解明に取り組んだ。第4章では、調査対象者全員である24名のデータを分析した結果、大学生は、自身の高校交換留学体験を<成長の源泉として位置づけ>ており、またその位置づけプロセスの起点となるのが、大学進学における<我が道を行く人生選択>であることがわかった。自分がやりたいこと、信じたこと、合っていることに基づいた彼らの主体的な進路選択は、留学中の《自文化相対化プロセス》と《自信強化プロセス》に支えられている。その経験を一言で表すならば、現地の人々との信頼関係の構築である。さらに、大学入学後の生活においては、<留学体験の外言化>と<現地人化しない留学との対比>によって、留学体験の位置づけが促されることもわかった。

この結果からうかがえるのは、高校交換留学体験と帰国後のプロセスにおいて、「橋渡し型」の社会関係資本と「接合型」の社会関係資本が交互に現れるということである。踏み込んで言うならば、「接合型」社会関係資本が「橋渡し型」社会関係資本を生み出している可能性がある。ホストファミリーをはじめとする現地の人々と信頼関係を構築した留学体験者は、後年、「橋渡し型」の社会関係資本に関わっていくのではないか。こうした予測をもとに、第5章では海外進学した留学体験者の進路選択プロセスを明らかにするとともに、そこに現れる「橋渡し型」への志向性について検討した。

交換留学体験者の海外進学選択プロセスは、《高校留学での手応え》から英語圏の大学への進学という選択肢が浮上し、《英語圏進学へのためらい》を感じつつ国内と海外の両方のリサーチを行う探索段階、それを基に《国内では不十分と判断》する評価段階、《サポート獲得に動く》ことや<国内進学先の確保>によって英語圏進学が後押しされる決定段階、の3段階で構成される。その中では《国内では不十分と判断》することが中心的な役割を果たしており、そのように判断するための材料は高校留学に由来していた。英語圏の大学が進学先候補となるのは、高校留学での成長を自ら感じたことで<再留学再成長を確信>し、それによって<英語圏なら国際的将来像に近づける>と考え、また<英語圏生活への自信>もその支えとなっていたためである。

このプロセスの中で特に注目されるのが、<英語圏なら国際的将来像に近づける>の「国際的将来像」である。調査対象者の「国際的将来像」には、単に海外で働くということ以上に、自分がどのような方法で世界と関わるかという指針のようなものが含まれており、それは多分に「橋渡し型」で、能動的であった。第4章の結果と合わせるならば次のことがいえるだろう。すなわち、高校交換留学を通して「橋渡し型」の社会関係資本である交流団体やホストファミリー、ホストスクールの働きに触れ、現地の一員としてコミュニティに組み込まれた留学体験者は、充実した「接合型」社会関係資本の中で、社会や人間に対する信頼感を育み、自分たちの生きる社会をよくするために、次は自分が「橋渡し型」の役割を果たしたいと考えるようになったのである。こうした展開は留学の成果の1つといえ、それはボランティアベースの異文化生活体験を最重要視する高校交換留学であったことと切り離しては考えられない。

本研究の第2の目的である、高校生の立場から留学支援策を提示することについては、第4章、第5章の結果を用いて留学中と帰国後の支援策を検討するとともに、留学への動機形成を支援するために、第6章で高校生がどのようなプロセスで高校交換留学を決意していくのかを明らかにした。アメリカへの交換留学については、《国際的キャリアビジョンからの逆算》と《過去ベースの西洋英語圏志向》という2つ

の動機をもとに、《受験優先規範からの解放》の影響も受けて《アメリカ高校留学を決意》する、というプロセスが見出された。また、非英語圏への交換留学については、《高校交換留学に関心を持つ》と《非英語圏留学を価値づける》、さらに留学先の国を決定する<治安優先の親子協議>という、3つの段階があることが明らかになった。これらの結果を受けて、留学参加に至るか否かを左右する要因のうち「つながり」に関わるものを整理した。

第7章は総合考察として、まず、「グローバル人材」育成の手段としての留学とは異なる留学の捉え方として、「つながり」を生み出す留学という見方を提案し、高校交換留学が「つながり」すなわち社会関係資本を強化するメカニズムを説明するとともに、高校交換留学による「つながり」の強化が「共生配慮型の競争社会」の実現に与するものであることを主張した。その上で、そうした留学を促進・支援する具体的な方法を、本研究の結果に基づいて提示した。まず、帰国後の位置づけを促す策として、主体的な進路選択の支援と、大学における支援を提案した。また、高校卒業時の進路選択支援、特に海外進学の場合には、交換留学体験者の立場に立った海外進学動機の理解や、より実用的なサポートを受けられるような指導の必要性を提示した。さらに、留学動機の形成のための支援としては、第6章で整理した「つながり」の強化を図ることが有効だと考えられるため、①情報やピア・ネットワークへのアクセス、②過去の海外経験等で得た人とのつながり、③教員等からのサポート・家族からのサポート、のそれぞれを強化する方法を述べた。

本研究の意義は次の点にある。まず、留学研究においては、「『グローバル人材』育成のための留学」という、現在の支配的な捉え方に異議を唱え、「つながり」の形成、およびそれによる「共生配慮型の競争社会」の実現のための留学、という独自の理解を提示した点である。留学を教育実践の1つとみなすならば、そこには育てたい人材像があり、その先には実現したい社会像があるはずである。しかし、そのような社会像の議論は十分ではない。留学研究の役割の1つは、そうした議論に役立つ知見を提供することだと考えられるが、実際には、社会のあり方にまで踏み込む留学研究は限られている。本研究はその1つの例となるべく、あえてこの大きな課題に正面から取り組んだ。

社会関係資本に関する研究としては、高校交換留学が社会関係資本を強化するメカニズムを提示した点が理論的に新しい。これは稲葉（2011）の議論を基にしたものであるが、特定化信頼と一般的信頼は別個のものであるという従来の理解とは異なり、特定化信頼が一般的信頼に転換する可能性を指摘した。転換のしくみを内包するような実践は高校交換留学の他にもあることが予想され、そうした実践の分析を蓄積することによって、現代社会の課題である一般的信頼の向上に与すると考えられる。

また、方法論の面からは、M-GTAが留学体験に関する研究に有効な研究方法であることを示した。留学は、その前後も含めて、決して1人でできる体験ではない。社会的相互作用こそが留学体験であるといっても過言ではなく、社会的相互作用のプロセスを描き出すM-GTAとは整合性がある。留学体験に関するM-GTA研究の蓄積に向け、本研究はその一例となると考えられる。

本研究を通して新たな課題も浮上した。本研究は、調査対象者の高校留学以前の海外経験が、アメリカ交換留学を決意する1つの要因であることを指摘したが、以前の海外経験と高校交換留学の動機づけとの関連は、対象者のバリエーションを増やしてさらに検討すべき課題である。また、理論面では、社会関係資本と社会的相互作用の関係性の解明が新たな課題である。M-GTAで描き出したのは社会的相互作用のプロセスであるが、それらの社会的相互作用の一部は、本研究で言及した社会関係資本と重なる。ただし、両者はイコールというわけではないため、その関係を整理することが求められる。両者の関係性をモデル化できれば、あいまいさが指摘される社会関係資本概念に新たな知見をもたらすものとなるだろう。

本研究は、岩本綾君が高度な研究遂行能力と当該分野における豊かな学識を有することを示すものであり、その研究成果は留学研究およびM-GTA研究にとどまらず、広く異文化間教育研究の今後の発展への大きな貢献が期待できることを示している。よって、本学位審査委員会は、岩本綾君が博士（学術）の学位を受ける資格があるものと認める。